

ILCAA

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

2023 – 2024

所長挨拶



アジア・アフリカ
言語文化研究所 所長

近藤 信彰

アジア・アフリカ言語文化研究所は、1964年に人文系唯一の共同利用研究所として発足して以来、言語学、人類学、歴史学の3分野の研究者が手を取り合い、フィールドワークに基づく基礎研究と国内外の研究者が参画する共同研究を積み重ねてきました。2010年には「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同研究拠点」に認定され、アジア・アフリカ世界に関する新たな認識の枠組みを提供する基盤形成に寄与しつつ、これらの地域の多様

な言語・文化のあり方をモデルに、未来の多面的世界の発展性を追求することをミッションとし、共同研究を推進しています。グローバル化が破壊的な勢いで進行する世界において、アジア・アフリカの多面的なあり方から学び、新たな未来をともにつくるという視点は一層重要なものとなっています。本研究所は今後も国内外の広範な研究者の協力を得て共同研究を展開し、最新の技術を活用しながら、その成果を広く発信していく所存です。



AA研の研究活動

アジア・アフリカ言語文化研究所（以下、AA研）は、文部科学大臣によって言語学・文化人類学・地域研究分野の共同利用・共同研究拠点に認定された「アジア・アフリカの言語文化に関する国際研究拠点」です。その使命のもと、AA研ではおもに以下3つの領域において、国内外の関連研究者コミュニティによる共同利用・共同研究を推進しています。

(1) 臨地研究（フィールドサイエンス）に基づく国際的研究拠点としての共同利用・共

同研究

(2) アジア・アフリカ地域の言語文化等に関する研究資源の収集・分析・編纂および研究成果の発信

(3) 研究活動及び研修・出版・広報等の活動を通じた次世代研究者養成

これに基づき、基幹研究プロジェクト（pp.4-5）、国内外の研究者との共同利用・共同研究課題（pp.6-9）、次世代養成（pp.10-11）、研究資源の蓄積と公開（pp.12-15）等を積極的に展開しています。

研究組織構成

AA研は、フィールドサイエンス基礎研究部門（2023年度設置）、情報資源利用研究センター（IRC）、フィールドサイエンス研究企画センター（FSC）という組織体制をとるとともに、全学研究組織として2022年10月に設立したTUFスフィールドサイエンスcommons（TUFISCO）の運営においても中心的な役割を果たしています。AA研所員はこれらのいずれかに所属し、個々の専門研究領域に関わる探求を深めながら、基幹研究、共同利用・共同研究



Contents

全所プロジェクト	2
基幹研究	4
共同利用・共同研究課題	6
研究者養成	10
オンライン研究資源の開発	12
フィールドサイエンス	16
外部資金による共同研究	18
海外研究拠点	20
出版物・展示企画	21
所員一覧	裏表紙

課題を運営し、国内外の研究者との密接な協力を基づいて、共同利用・共同研究拠点にふさわしい活動を推進しています。フィールドサイエンス基礎研究部門では、言語学、歴史学・地域研究、文化人類学を専門とする所員が基礎研究を推進しています。IRCはアジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と、それを活用した共同研究手法の開発を主に行ない、多くの情報資源をオンラインで公開しています (pp.12-15)。FSCはAA研の

研究活動の根幹である臨地調査の手法をより実践的・理論的に洗練させ、臨地調査に関わる研究者間の学問領域を横断した連携を担うことを目的に活動を展開しています (pp.16-17)。

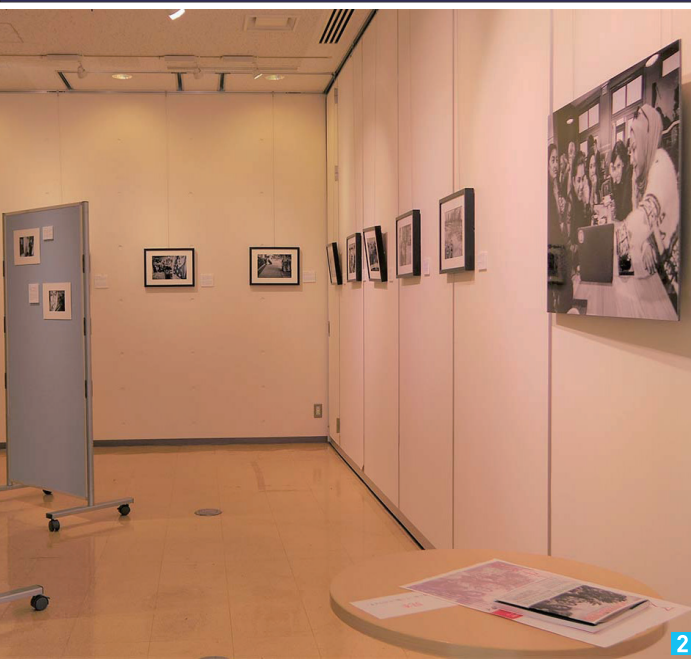
全学研究組織TUFiSCoでは、フィールドサイエンスの手法を開拓し、その成果を広く社会と共有することに取り組んでいきます。特にデジタル・ヒューマニティーズによる新たなアジア・アフリカ研究の可能性を追求することを目指します。



<http://www.aa.tufs.ac.jp/>

トランスカルチャー状況下における分極と共生の解明： アジア・アフリカの人々とともにつくる 人文知の「共有」と「対話」のプラットフォーム構築

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/institute-wide-program>



多様性の捉え方の変化—「多文化共生」から「トランスカルチャー状況」へ

アジア・アフリカの社会は、その言語的・文化的多様性によって特徴づけられています。その多様性は従来固有の言語・文化を基盤とし、アイデンティティを共有する比較的安定したコミュニティが複数共存する「多文化共生社会」として捉えられてきました。しかし実際にはそのような固定的なコミュニティは仮想的なものである場合も多く、いつの時代にもコミュニティの構成員である個人が状況に応じて複数のアイデンティティを使い分けるといった複雑な状況がありました。この状況は人・モノ・情報が高速で行きかう現代において、より顕在化し、個人の帰属やコミュニティの様相がより流動化しつつあります。このような「トランスカルチャー状況」の下では新たな文化の生成や多様な生き方の実現が可能となる一方、COVID-19の流行に伴う社会的変化の影響もあり、人々の対立を生む様々な事態、例えば差別や不可視化されていた矛盾が表面化してきました。

人間社会における「信頼」「寛容」の機序を探る

このような状況の中、人間社会において人々が、他者への寛容さ、信頼を保ち共存していく方法は存在するのでしょうか。新たな時代の共生社会のあり方とはどのようなもののでしょうか。本プロジェクトでは、この問いに対する答えをトランスカルチャー状況の中を生きるアジア・アフリカの人々との対話を通じて模索します。

日本の社会におけるトランスカルチャー

日本の社会は従来言語の面でも文化の面でも比較的均質な社会であると捉えられてきました。しかし、近年外国籍居住者の増加などによりもたらされつつあるトランスカルチャー状況の中、国内においても差別や矛盾の表出が深刻化しつつあります。本プロジェクトでは一般公開イベントを通じて市民との対話も積極的に行い、互いを尊重するよりよい社会のあり方を模索します。

人文学の枠を超えた「総合知」の集積とその発信

流動的で複雑化する現代社会を多角的に捉えるには、人文学の枠を超えて、自然科学の知見をも取り込んだ「総合知」を集積してゆく必要があります。このプロジェクトではアジア・アフリカで臨地研究を行うのみならず、本研究所が行ってきた地域研究・歴史学、言語学、人類学の分野内に留まっていたフィールドワークのデータをオープンデータとして整え、分野を超えた活用を可能とすることにより異分野協働型のフィールドワーク手法を開発することを目指します。さらに発信力を強化し、こうして得られた成果をアカデミアの外へと開く方法を模索します。これらの活動は2022年に発足した全学組織TUFScフィールドサイエンスコモンズ(TUFiSCo)が主体となり学内諸機関と連携を進めます。



フィールド・ワーカー

感染症に関わるフィールド・ワーカーの経験と知見を共有し蓄積する特設コーナーです。どういったように影響したのかについての記録を共有し、後世に伝えることを主目的とし、その前後における世界各地の人々の様子や報告、そして各人の専門的見地からの、この感

記事を開覧したい地域を選択してください

アフリカ 中東 アジア

6

- 1 プロジェクトの目指すところ 2 AA研で開催された写真展『マイノリティとして生きる：アメリカのムスリムとアイデンティティ』(2022年11月18日から12月15日) 3 ベトナム風サンドの屋台：外国籍住民が多く居住する団地「いちょう団地」の祭りの一コマ 4 仮面を選ぶ子どもたち。子どもを対象としたイベント「地球たんけんたい」<「バリ島の仮面をつけて変身しよう」(2022年10月9日)にて(＜写真提供＞マナラゴ 環境と平和の学びデザイン＜開催場所＞京都大学東南アジア地域研究研究所) 5 TUFSc Cinema『大地と白い雲』上映会で観客に中国・内モンゴルの今日の状況を伝えるトークも開催 6 ウェブサイト『COVID-19とフィールド・ワーカー』ではフィールドワーカーの視点からコロナ禍における世界各地の状況をリアルタイムで報告(p.17)

社会性的人类学的探究： トランスカルチャー状況と寛容／不寛容の機序

人間の生を支える「社会性」とはいかなるものであるのか。
本基幹研究は、アジア・アフリカの寛容と不寛容の機序を、個別性を越えた普遍的・実践的視野から探究します。



1 牧畜民チャムス：木陰に佇む少女たち / ケニア，バリンゴ / 1990年（撮影：河合香吏） 2 ネラ・フォキル / バングラデシュ，クミッタ県ダウトカンディ / 1999年4月（撮影：外川昌彦） 3 マレーシアのコスプレイベントにて / マレーシア / 2019年10月（撮影：床呂郁哉） 4 バテッの子どもたち：パショウの葉を日傘に伐採道を行く / マレーシア，クランタン州クアラ・コ / 2011年7月16日（撮影：河合文）

研究代表者：西井涼子

関連所員：河合香吏，外川昌彦，床呂郁哉，
吉田ゆか子，河合文，村津蘭

<http://www.aa.tufts.ac.jp/ja/projects/anthropology-core>

人間は一人では生きられない群居性動物であり、その生を支える「社会性」がいかなるものであるのかは、我々にとって根源的な問いです。現代では、これまで会う機会がなかったような人やモノが地域や民族、国民国家の枠組みを越えて出会い、互いに影響を与え合うトランスカルチャー状況が生じています。そうしたなか、差別や排除が深刻化したり、差異を包摂する新たな社会性が希求されたりしているのが現状です。さらに、ポストコロナ状況においては、我々の生きる世界が、人間だけでなく、ウイルス、動植物、そしてモノとのダイナミズムから多元的に成り立っているという視点から社会性を考えることがますます重要となるでしょう。本研究では、アジア・アフリカのフィールドにおける人々の実践に着目しながら、寛容と不寛容が生じる機序を探究することを目的とします。そして、トランスカルチャー状況においてポストコロナを「ともに生きる」ための議論のプラットフォームの創出をめざします。

「記憶」のフィールド・アーカイビング： イスラームがつなぐ共生社会の動態の解明

中東はアジアとアフリカをつなぐ地域であり、イスラーム圏はそれを大きく包み込む地域概念です。アジアとアフリカをイスラームとその関係性から見直す研究を推進しています。

研究代表者：野田仁

関連所員：飯塚正人，小倉智史，黒木英充，黒沼太一，後藤絵美，近藤信彰，高松洋一，床呂郁哉

グローバル化する現代において、秩序崩壊や宗教対立から生じる矛盾に対峙し、関係回復の道を探ることが求められています。世界各地のムスリム社会が築いてきた寛容な共生社会の経験を、過去から現在につながる「記憶」として記録・蓄積します。これをフィールド・アーカイビングとして、情報の可視化・公開・利用も含めて総合的に捉えようとするものです。「イスラーム信頼学」プロジェクト (p.18) や、共同研究「グローバル地中海地域研究」(p.19) と連携する他、海外拠点を活用した学术交流、セミナーを通じた次世代研究者育成にも積極的に取り組みます。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/history-core>



アジア・アフリカの言語動態の記述と記録： アジア・アフリカに生きる人々の言語・文化への深い理解を目指して(略称 DDDLing)

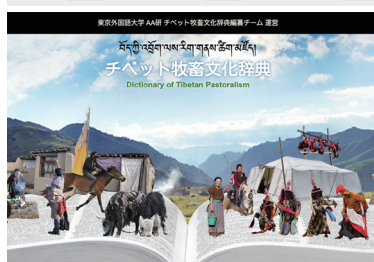
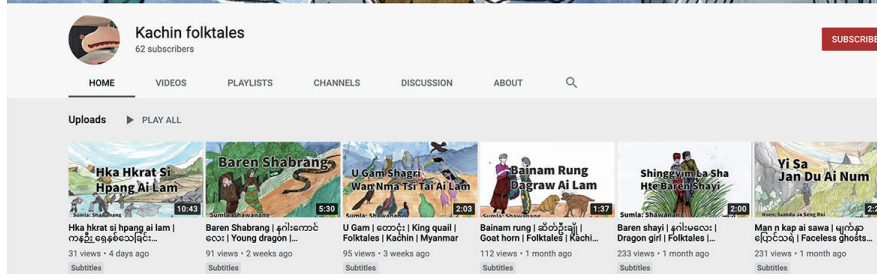
人々の「語り」の記録を通して、多言語混在状況でのよりよい相互理解のあり方を探ります。

研究代表者：山越康裕

関連所員：安達真弓，荒川慎太郎，倉部慶太，呉人徳司，児倉徳和，澤田英夫，塩原朝子，品川大輔，中山俊秀，星泉，渡辺己

アジア・アフリカの社会は、複雑な形の多言語状況が見られるようになってきました。この状況を正確に把握するためには、これまで記述言語学の枠組ではとらえることが難しかった事柄、例えば、異なる言語コミュニティ間のかかわりあい、言語の通時的变化、さらにはその背景にある現地社会の構造や文化・歴史にも目を向けて記述・記録を行っていく必要があります。そこで、これまで単なる言語データとして扱われてきた話者の語りを「経験・知識を伝えるメッセージ」として捉え、隣接分野を含むさまざまな観点からの分析を試みます。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/ling-core>



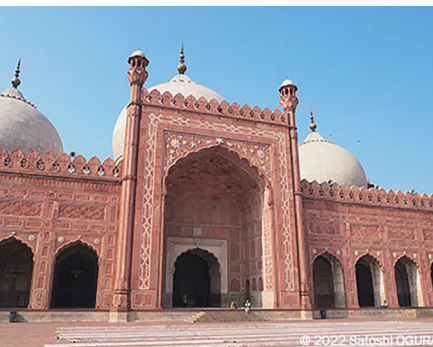
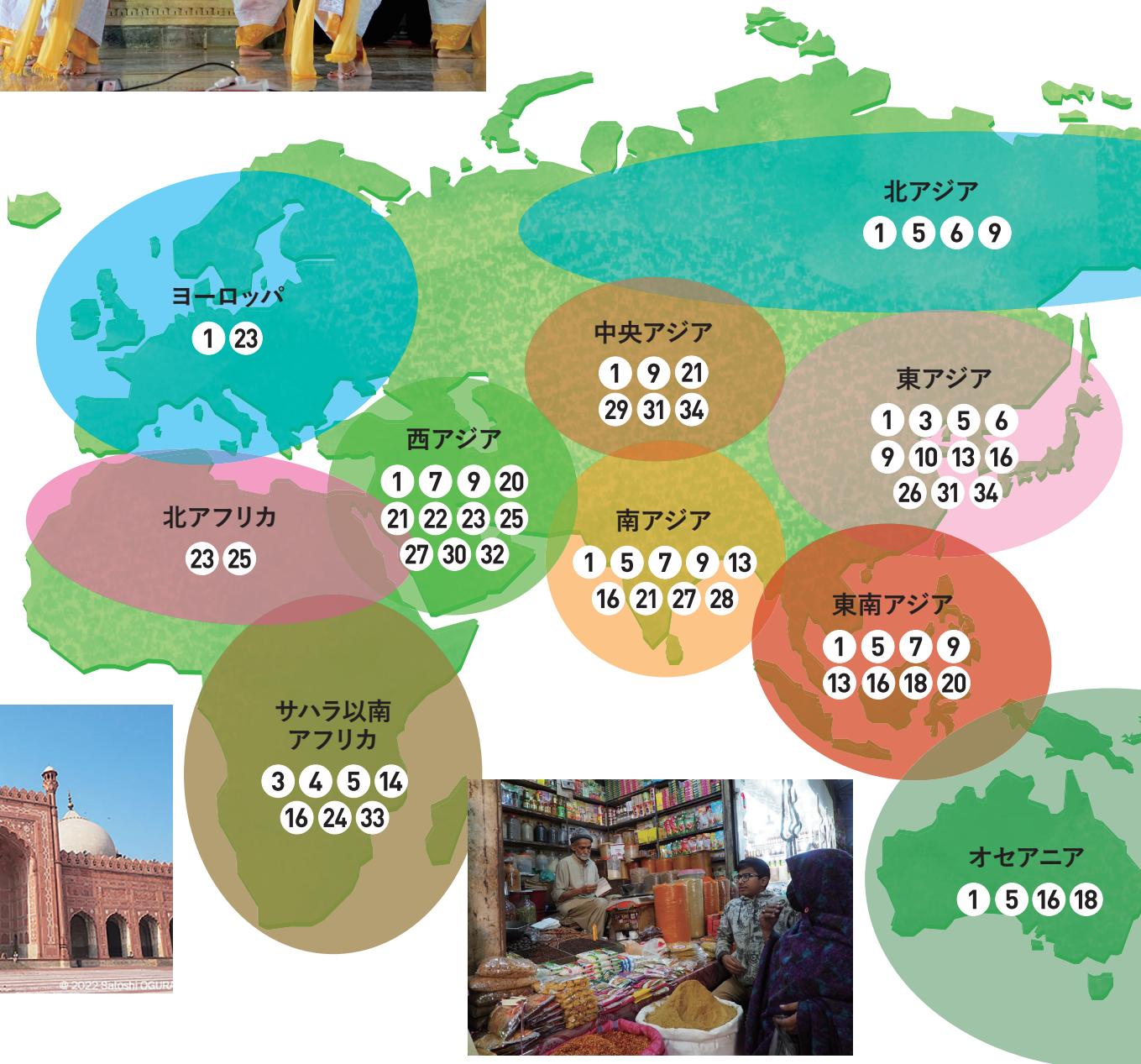
対象地域 Target Areas

AA 研の共同利用・共同研究課題が対象とする地域はアジア・アフリカ地域に限らず、全世界に及んでいます。国内外の延べ300名を超える共同研究員が参画しています。
※地図中の番号は右のリストの番号に対応しています。



言語学系

- ① 移民の継承語とエスニックアイデンティティに関する社会言語学的研究
- ② 理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求
- ③ 日琉語族内的声調類型論の再構築
- ④ 多言語混在状況を前提としたアフリカ記述言語学研究の新展開
- ⑤ 通言語的観点からみた音声類型論
- ⑥ アイヌ語現地調査資料のアーカイブ構築にかんする学際的研究(2)
- ⑦ ジャワ語及び東南アジア諸語テキストにみる「イスラーム化」前期
- ⑧ ナラティブをめぐる形態統語論
- ⑨ アジア文字研究基盤の構築(3)－文字研究術語集の構築－
- ⑩ 土田滋博士の台湾原住民語資料に基づく研究
- ⑪ 「失敗」のフィールド言語学



人類学系

- ⑫ 死の人類学再考：変容する現実の人類学的手法による探究
- ⑬ 新型コロナ感染拡大下における芸能に関する学際的研究
- ⑭ グローバル時代のアフリカの「若者」のキャリア志向と「現実」との交渉：東部アフリカを中心に
- ⑮ 身体性の人類学（「もの」の人類学的研究（4））
- ⑯ 負債の動態に関する比較民族誌的研究2：人間経済における負債の多元性、相克、創造性
- ⑰ 南アジアの社会変容と多極的なムスリム社会の動向－バングラデシュの構造変動とイスラーム主義の統合的理解に向けて－
- ⑱ 空間統治と民族関係の人類学－東南アジアを中心として－
- ⑲ 「分かちあい」の起原－ヒトとヒト以外の霊長類における共存の諸相－
- ⑳ 東南アジアにおけるイスラーム主義と社会・文化要因の相互作用に関する学際的研究（2）－ミクロとマクロの視点から－

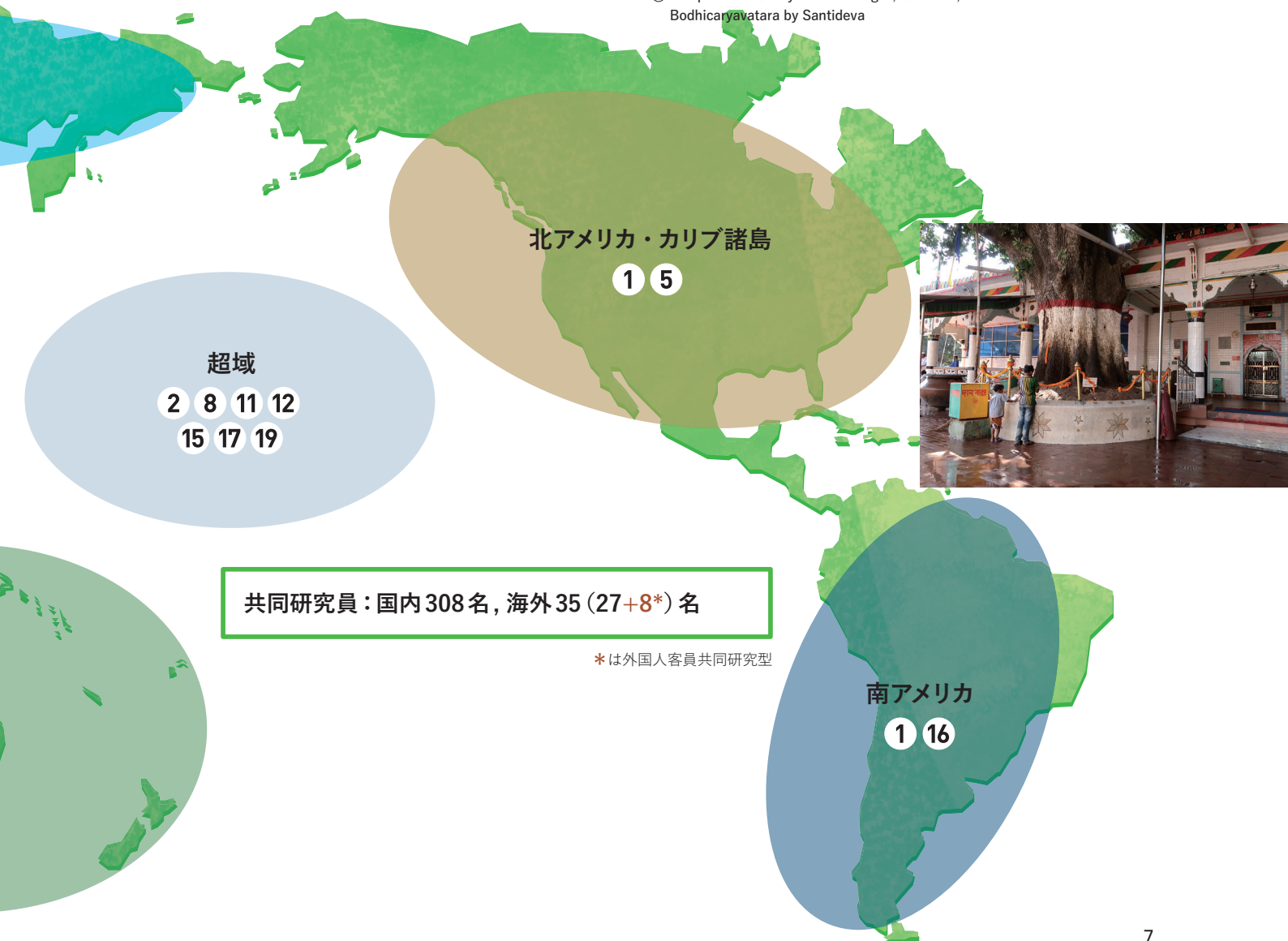
地域研究・歴史学系

- ㉑ イスラーム聖者廟の財産管理に関する史料学的研究：イラン・サファヴィー朝祖廟を事例として（2）
- ㉒ パレスチナ／イスラエル紛争の変容：最終的地位と新たな課題
- ㉓ 接続する海としての地中海
- ㉔ アフリカ食文化研究－変貌しつつあるその実像に迫る－
- ㉕ カイロ歴史地区の文化遺産アーカイビングと研究・教育実践
- ㉖ 中国古代簡牘の横断領域的研究（5）－歴史情報学活用による総合的文書簡牘学の確立を目指して－



外国人客員共同研究型

- ㉗ A Muslim epic and its politics in early modern Asia: Amir Hamza from Iran to South and Southeast Asia
- ㉘ The Political Rise of Deobandi Ulama: Maulana Hafezzi Huzur and His Legacy in the Politics of Islamism in Bangladesh
- ㉙ Research on Kazakh Documents in the Archives of Russia and China
- ㉚ Multi-dimensional Relationships between Syrian Refugees and Lebanese Host Communities
- ㉛ Joint research on documentation of literary and colloquial materials in Oirat Mongolian
- ㉜ Bequeathal Strategies and State Response in Mamluk Jerusalem: Decoding Evidence in the Haram Documents Collection
- ㉝ Sexual Education Handbook for University Students in Kenya
- ㉞ Comparative Study of the Tangut, Sanskrit, Tibetan versions of the Bodhicaryavatara by Santideva



言語学系

Linguistics

MAP⑧ 「ナラティブをめぐる形態統語論」



研究代表者：塩原朝子 (AA 研)

AA 研所属：倉部慶太，児倉徳和，渡辺己
共同研究員：稲垣和也，遠藤智子，大野仁美，木本幸憲，熊切拓，中川奈津子，成田節，野元裕樹，Nicholas EVANS, Stefan SCHNELL, Danielle BARTH

言語学者がよく知られていない言語を調査する際、基礎語彙の収集や文法調査に続いて民話やライブストーリーなどに代表されるナラティブを自然発話のサンプルとして収集し、文法記述に用います。しかしナラティブで語られるのは多くの場合、発話場面と時空間的に離れたところで起こったできごとで、これは人間の言語生活全般から見るとやや特殊なジャンルであるといえます。このジャンルは各言語の特徴をどのくらい映し出しているといえるのでしょうか。この問いに答えるため、このプロジェクトでは様々な言語におけるナラティブと会話のデータを対照し、それぞれのジャンルが示す形態統語論の特徴を探るとともに類型化を試みます。また、研究に用いられるテキストコーパスのよりよい規格についても議論を行います。



<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp276>

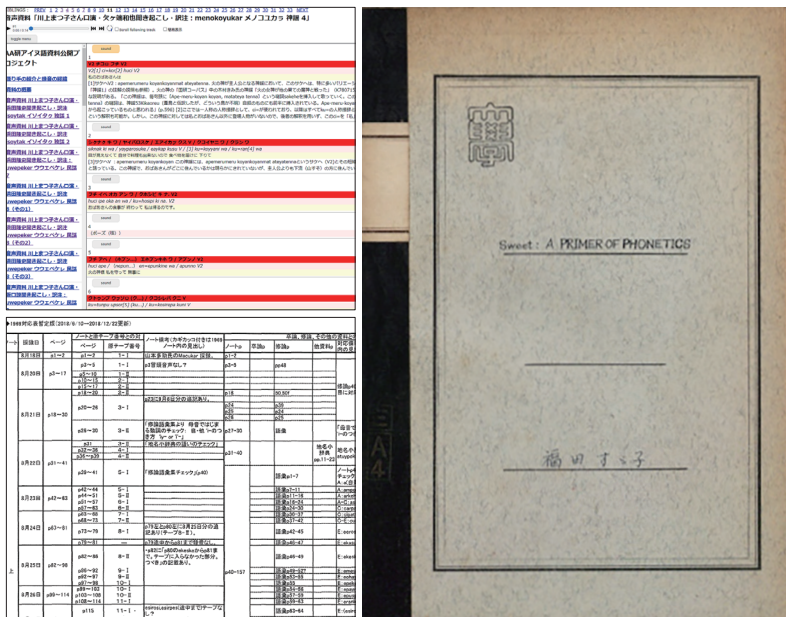


MAP⑥ 「アイヌ語現地調査資料のアーカイブズ構築にかんする学際的研究(2)」

研究代表者：奥田統己 (札幌学院大学)

AA 研所属：山越康裕
共同研究員：阿部佳恵，欠ヶ端和也，菊池英明，児島恭子，小林美紀，阪口諒，高橋靖以，直川礼緒，中川裕，深澤美香，山田慎太郎，吉川佳見

2014年度にAA研に寄贈された史上最大級のアイヌ語調査資料について、資料そのものの分析(内容の把握、資料相互の関係の理解など)、遺族・現地との関係の維持と人権の保護、保存と公開および利用の促進などの諸側面にわたり、よりよいアーカイブズ構築の方法を探求し具体的な実践を進めるために、言語学、歴史学、音楽学、資料・アーカイブズ学、音声データベース工学などの専門家が協同して学際的な研究を行っています。許諾が得られた資料については、オンラインでの公開を随時進めています。



<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp266>

人類学系

Anthropology

MAP15 「身体性の人類学 (『もの』の人類的研究(4))」

Pick up!

研究代表者：床呂郁哉 (AA 研)

AA 研所員：河合文，後藤絵美，西井涼子，吉田ゆか子
共同研究員：岩瀬裕子，大石高典，奥野克巳，金子守恵，
Caitlin Christine COKER，小谷弥生，後藤吉彦，佐藤知久，
塩谷もも，染谷昌義，田中雅一，田中みわ子，中村耕作，
丹羽朋子，西江仁徳，松嶋健，箭内匡，山本芳美

従前のAA研の共同利用・共同研究課題「ものの人類的研究」等を引き継ぎながら，新たに<身体性>をキーワードとして，身体を，その周囲の多様な<もの>や環境との関係を含む拡張された身体性に焦点を当てて更に研究を発展させる試みです。具体的には，アジア・アフリカを中心とする各地の多様な身体的実践や表現を対象に，行為者を取り巻く多様な<もの>や環境等との動的な連関の相において研究していきます。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp277>



地域研究・歴史学系

Area Studies/History

MAP22 「パレスチナ／イスラエル紛争の変容：最終的地位と新たな課題」

Pick up!

研究代表者：鈴木啓之 (東京大学)

AA 研所員：後藤絵美
共同研究員：今野泰三，白杵陽，江崎智絵，金城美幸，
児玉恵美，菅瀬晶子，高橋宗瑠，立山良司，田浪亜央江，
鶴見太郎，南部真喜子，錦田愛子，浜中新吾，細田和江，
役重善洋，山本健介

本研究課題は，パレスチナ／イスラエル紛争をめぐる近年の変容について考察するものです。パレスチナ／イスラエル間の和平交渉の停滞が問題視されてすでに長い時間が経過しています。それは当事者の交渉姿勢の問題や，交渉枠組みそのものの課題によって説明されてきましたが，本研究では停滞をめぐる状況の動的な側面に着目します。特に，境界線の画定やエルサレムの帰属，難民の帰還権などの重要課題（最終的地位）がどのような変容を遂げたのか，また何が新たな課題として浮かび上がっているのかを示し，これによって和平交渉停滞の要因を複合的に明らかにすることを目指します。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp282>



中東・イスラーム関連セミナー

中東もしくはイスラーム世界に関心をもつ大学院生や若手研究者を対象に、最新の研究情報を提供して知識の幅を広げ、研究発表や討論の能力を高めることを目的としています。

●中東☆イスラーム研究セミナー／教育セミナー

「研究セミナー」では、大学院博士後期課程在籍者や博士論文の準備をしている方、その後のブラッシュアップをお考えの方を対象に、長時間の研究発表と徹底した討論の機会を提供します。また、人気コーナー「私の博士論文」では、若手の研究者が自らの博士論文執筆の苦勞を語り、実用的な情報も提供しています。毎年12月に行われ、2005年度から2022年度まで114名が修了しています。

「教育セミナー」は、大学院生を対象に、AA研スタッフと所外からの招聘講師による講義と受講生の研究発表および討議からなるものです。全国から集まる受講生にとって、講師の研究者とのみならず、受講生相互でも交流する貴重な機会となっています。毎年9月に全4日間の日程で行われます。こちらは、2005年度から2022年度までで277名が修了しています。

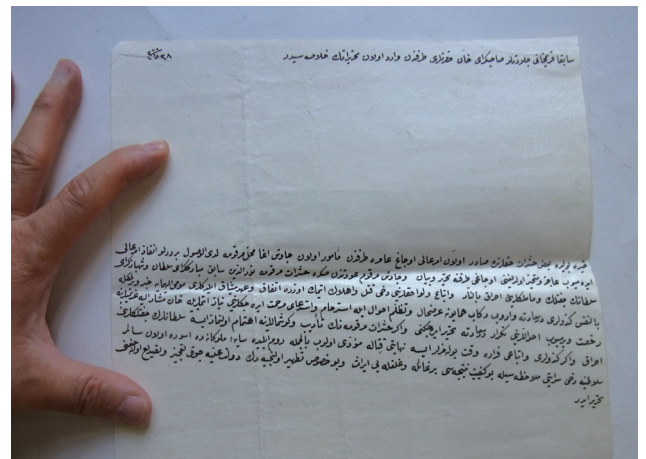
<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/meis/meis-semi>



●ベイルート若手研究者報告会

日本において中東に関連する人文・社会科学（地域研究・歴史学・人類学・イスラーム学・政治学・経済学など）を専攻している若手研究者に対して、中東の学術の中心地ベイルートにて研究報告する機会を提供しています。若手研究者の研究成果を、レバノンをはじめとする中東の研究者たちに広く知っていただくとともに、専門家同士の密度の濃い議論が交わされる場となっています。2006年度から2022年度までに70名が参加しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/meis/beirut-semi>



●オスマン文書セミナー

オスマン朝で作成された手書きの文書・帳簿を古文書学・アーカイブ学的視点から学ぶ演習形式のセミナーです。毎回異なった史料類型を取り上げ、最初に講師が様式論的解説を行なった後、参加者を指名して講読していきます。2008年度以降、原則年に1回、2日間にわたって開催し、学部生から大学教員まで毎回多数の受講者が参加しています。

<https://meis2.aa-ken.jp/ottoman.html>

言語研修

AA研の設立後間もない1967年から開催している短期集中型の研修です。研究者とネイティブ話者がペアで講師を務め、生きた言語を伝えてきました。

言語研修は当研究所が設立後間もない1967年から開催している短期集中型の研修です。アジア・アフリカで話されている言語を主に扱い、国語・公用語だけでなく少数民族の言語など他では学習することができないような言語の研修も積極的に行なっています。どの研修も対象言語を専門とする研究者とネイティブ話者がペアで講師を務め、語学だけでなく現地調査や文献調査を行うために必要な言語知識や調査の手法など、専門的知識の教授も行っています。記述言語学のトレーニングとして研究がほとんど進んでいない言語を対象としたフィールドメソッド方式の研修も行なってきました。

これまでに研修を実施した言語の数は、延べ145言語、修了者数は延べ1300名以上にのぼります。修了者の中にはアジア・アフリカ地域の専門家として活躍している人も数多くいます。

講師陣によって独自に開発された教材は、この研修の大きな特徴であり学術的成果でもあります。それら教材は大学リポジトリ <http://repository.tufts.ac.jp/> にて公開されています。また、ウェブサイト「言語研修オンライン」<https://ilc-online.aa-ken.jp/> では、研修内容の一部をオンライン・コンテンツ化して提供しています。

<http://www.aa.tufts.ac.jp/ja/training/ilc>

<http://www.aa.tufts.ac.jp/ja/training/ilc>

○フィールド言語学ワークショップ

アジア・アフリカの個別言語の記述的研究を専門とする研究者を対象にフィールドワーク言語学の手法を共有するためのワークショップです。主な参加者は大学院生・ポスドクなど若手研究者で大学の枠を超えた研究者ネットワーク構築の一助となっています。

フィールドワークの手法や収集したデータの処理方法、さらにはデータを研究に活かす方法までを扱う「テクニカルワークショップ」と若手研究者が記述的研究の成果を発表する「文法研究ワークショップ」の2つの枠で開催しています。



2022年度 アジア・アフリカ言語文化研究所
言語研修生募集

- ブリヤート語
- アゼルバイジャン語

この研修はアジア・アフリカ言語文化研究所が研究者養成事業の一つとして開催しているもので、アジア・アフリカ地域での現地調査・研究や専門的業務に役立つ現地語の習得を目的としています。日本の専門研究者と母語話者が講師を務めます。

写真(左上)：チェスモを築いたブリヤートの老人
写真(左下)：アゼルバイジャンのシスキ・ハーン宮殿

ことばであそぶ

文化／社会人類学研究セミナー

AA研の基幹研究における人類学系若手研究者育成事業として、実施しています。

2011年度より開催してきた本セミナーでは、博士論文や投稿論文を執筆中の文化人類学／社会人類学／生態人類学を専門とする大学院生や若手研究者が研究発表し、発表草稿を博士論文や投稿論文に練り上げるための学術的議論の場を提供しています。2015年度からは日本文化人類学会(次世代育成セミナー)との共催となりました。発表者ごとに、論文の査読に匹敵するようなかたちで内容にふさわしいコメントーターがつき、最新の学術的議論に関する情報提供を行なっています。またセミナー参加者が同じ世代の若手研究者の発表を聞いて異なる観点から意見を交わすことで、知識の幅を広げることも目的としています。本セミナーによって所属をこえた研究者間の交流が促進され、若手研究者の研究活性化につながることを期待しています。

<http://www.aa.tufts.ac.jp/ja/training/others/cul-soc-anthro-sem>

大学院教育

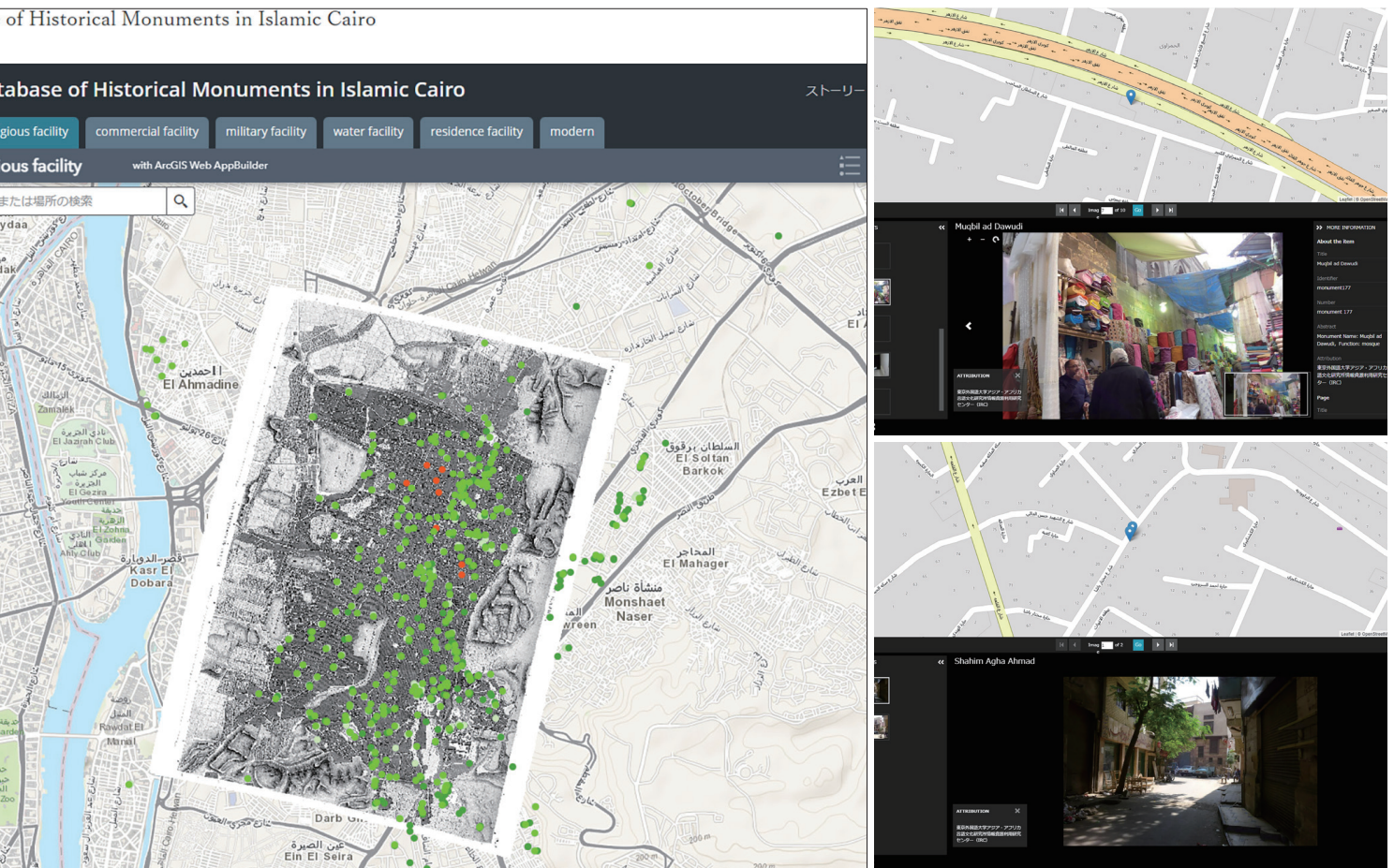
AA研は言語学・人類学・歴史学の各分野に多くのスタッフを擁しています。専任教員のうち助教を除いた教授・准教授全員が、東京外国語大学大学院総合国際学研究所における教育活動に参画しています。主としてアジア・アフリカ地域を研究対象とした、言語学、人類学、歴史学などを専門分野とする博士後期課程の学生を受け入れ、指導を行なっています。さらに、博士前期課程の教育活動にも一部教員が参画しています。AA研に所属する教員を主任指導教員とする大学院生は現在はまだ少数ですが、人類学・歴史学の合同ゼミをはじめとした特色ある手厚い指導を行なっています。AA研が展開している各種セミナーへの参加を通じて、同分野の他大学の大学院生との交流ができる点も大きな特徴といえます。

■指導体制

AA研の教員を主任指導教員とする博士後期課程では、一部合同ゼミの体制をとっています。人類学・歴史学ゼミでは毎週1回合同ゼミが開かれ、担当教員・学生の全員参加のもと活発に議論する場として論文指導に活かされています。

オンライン研究資源ピックアップ

カイロのイスラーム建築データベース



「カイロのイスラーム建築データベースの構築」

メンバー：

- 深見奈緒子 (日本学術振興会カイロ研究連絡センター),
- 中村覚 (東京大学),
- 吉村武典 (大東文化大学),
- 穴戸克実 (鹿児島県立短期大学),
- 熊倉和歌子 (慶應義塾大学)

<https://islamic-architecture.aa-ken.jp/>



2020年度にスタートしたこのIRCプロジェクトは、エジプト・アラブ共和国の首都カイロにあるイスラーム建築史跡の画像のデータベース化を進め、研究成果として2021年4月にオンラインリソース「カイロのイスラーム建築データベース」を制作・公開しました。

画像の公開にあたっては、昨今国内でも参加機関が増えている画像公開・共有の枠組みであるIIIF (トリプルアイエフ)を採用しました。加えて、地図上でイスラーム建築史跡の位置を確認しながら、その概要 (建造者や建造年など)を参照することができるジオリファレンスを作成し、トップ画面に表示させました。

トップ画面ではまた、宗教施設、商業施設、軍事施設、水利施設、住宅施設、現代的施設の6つのカテゴリからイスラーム建築史跡を検索することができます。また、ポップアップウィンドウ上部の「詳細」ボタンをクリックすると、各史跡の画像をご覧いただけます。

※本ウェブサイトおよびデータベースは英語で提供されています。

オンライン研究資源ピックアップ

牟田口義郎 西アジア・北アフリカ・地中海沿岸 写真データベース



東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

牟田口義郎 西アジア・北アフリカ・地中海沿岸 写真データベース

項目

● このデータベースについて

年代別

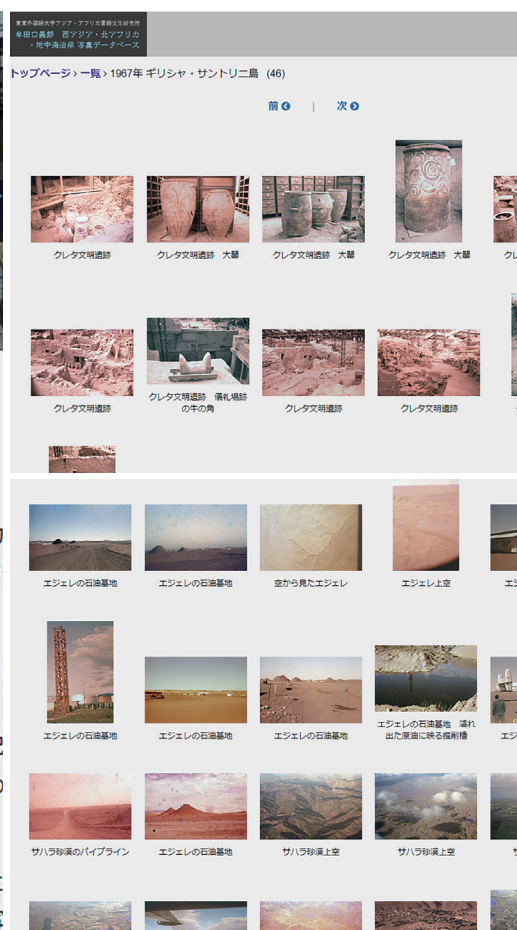
このデータベースは、故牟田口義郎氏が撮影した西アジア・北アフリカ諸国のカラー写真約5200枚をデジタル化し、撮影年と撮影場所を付してである。

撮影地別

操作案内

牟田口義郎氏は1959年から朝日新聞社の特派員としてエジプト・カイロス・パリ支局長も務めた。後に成蹊大学に奉職して研究者の道を進み、第三代会長や中近東文化センター理事長なども歴任している。朝日新聞記についてはアフガニスタン以西のすべての国々取材した。当時、日本で初めて訪ねた国々も多い。

牟田口の撮影対象は、いずれも当時、新聞記者でなければ肉迫すること地で、日本人が訪れることは稀であった。このため、牟田口が撮影した写



「牟田口義郎の撮影した1950～60年代の西アジア・北アフリカ・地中海沿岸諸国カラー写真画像データベース化」

メンバー：

牟田口章人(帝塚山大学)、
飯塚正人(AA研)

<https://photomutaguchi.aa-ken.jp/>



2020年度にスタートしたこのプロジェクトでは、故牟田口義郎氏が撮影した西アジア・北アフリカ・地中海沿岸諸国のカラー写真約5200枚をデジタル化し、研究成果として、2021年3月にオンラインリソース「牟田口義郎 西アジア・北アフリカ・地中海沿岸 写真データベース」を公開しました。このリソースは、年代別・撮影地別に写真を見ることができます。

牟田口義郎氏は1959年から朝日新聞社の特派員としてエジプト・カイロに赴任し、フランス・パリ支局長も務めました。後に成蹊大学に奉職して研究者の道を進み、地中海学会の第三代会長や中近東文化センター理事長なども歴任しています。朝日新聞記者時代、中東についてはアフガニスタン以西のすべての国々取材しました。当時、日本の新聞記者として初めて訪ねた国々も多くありました。

牟田口氏の撮影対象は、いずれも当時、新聞記者でなければ肉迫することが難しかった地で、日本人が訪れることは稀でした。このため、牟田口氏が撮影した写真は帰国後、当時としては貴重な資料として注目され、多くの写真集が複数の出版社から出版されました。それ以外にも数千カットに及ぶ35mmカラースライド(ポジ)が個人遺産として遺りましたが、2020年、AA研に所有権と著作権が譲渡されたのを機に、このデータベースが作成されました。

オンライン研究資源ピックアップ

バントゥ・マイクロバリエーション・デジタルアーカイブ

「南部バントゥ諸語の形態統語論的 Microvariation に関するテキスト
及び音声データのデジタルアーカイブ化」

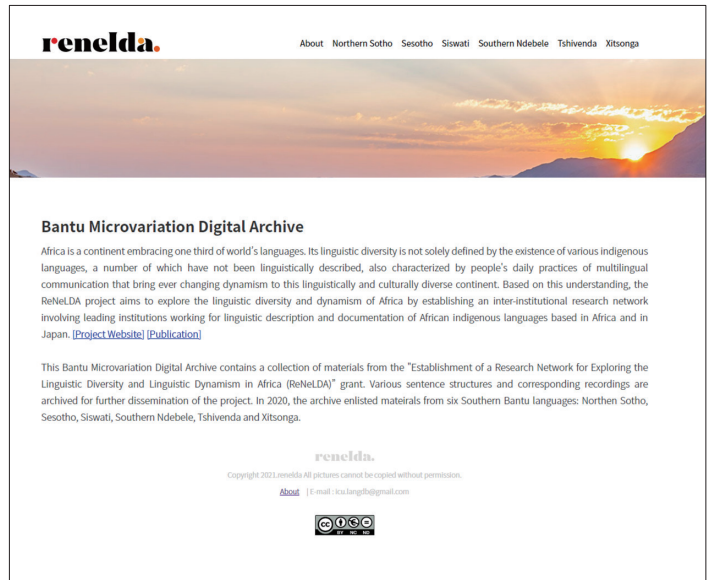


メンバー：李勝勳（国際基督教大学）、品川大輔（AA 研）

本プロジェクトは、南アフリカで話される現地民族語を対象として、バントゥ諸語類型論の進展に資する言語資料を電子的にアーカイブできる形で収集することを目的とする2020年度IRCプロジェクトです。プロジェクトの研究成果として2021年3月にオンラインリソース「バントゥ・マイクロバリエーション・デジタルアーカイブ」を公開しました。このリソースは、南部バントゥ諸語の6つの言語（北ソト語、南ソト語、スワティ語、ナンデベレ語、ヴェンダ語、ツォンガ語）のテキストや音声データと、それらのデータを音声分析プログラムにかけて生成された結果のコレクションです。

このリソースのデータセットは、2020年3月に南アフリカ・ヴェンダ大学にて、現地研究機関（MER Mathivha Centre for African Languages, Arts and Culture）との共同研究*によって収集、録音されたもので、全てのファイルには語のレベルでアノテーションが付けられています。

<https://renelda.aa-ken.jp/>



*データ収集のための共同研究調査は、日本学術振興会研究拠点形成事業（B.アジア・アフリカ学術基盤形成型）「アフリカにおける言語多様性とダイナミズムに迫るアフリカ諸語研究ネットワークの構築（略称：ReNeLDA）」の枠組みで遂行されました。

オンライン研究資源ピックアップ

Local Order Index

「日本における国際リスクのGISによる可視化」

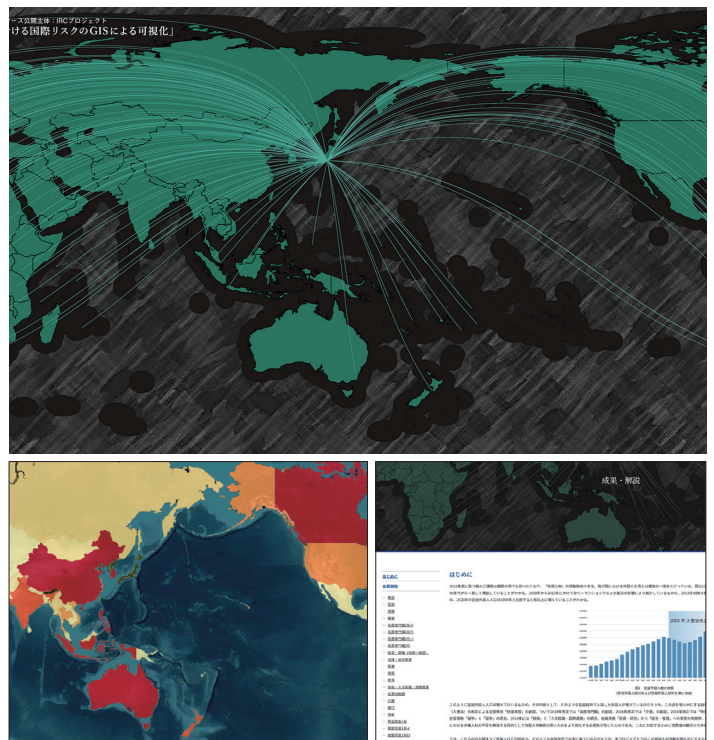


メンバー：佐藤将（AA 研）

2021年度にスタートしたこのIRCプロジェクトでは、「外国人材」の地域人口における地理的位置を「地理情報システム（GIS）」によって可視化したデータベースを構築し、研究成果として2022年3月にオンラインリソース“Local Order Index”を公開しました。このウェブページでは2006年から2020年までの在留資格別の出入国動向を地図上で見る事ができます。

我が国の全国の市区町村の多くは、少子高齢化による人口減少社会への対応という社会課題の解決を求められていますが、地域の持続的発展の基礎あるいは前提となるはずの人口規模や構成あるいは属性に関する最適解は、必ずしも明らかではありません。当該取り組みを通じて、グローバル社会における日本の人口構成の一部を明らかにすることで、社会課題解決の情報のハブの一助として機能することを願っています。

<https://lo-index.aa-ken.jp/>



AA研のオンライン研究資源



このサイトでは、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）の研究成果として公開された、オンラインリソースを広く紹介しています。オンラインリソースにはアジア・アフリカの言語の辞書・語彙集・音声付きテキストなどの言語資料や、貴重書のデジタル化資料、研究者が収集した写真資料などが含まれます。

リソースID	I0R000032
リソース名	日本語 アラビア文字紀年銘 (クロノグラム) 年代計算プログラム 英語(English) Abjad Numerals Calculator
概要	日本語 アラビア文字による紀年銘 (クロノグラム) をウェブ上で計算するツールです。ウィンドウにアラビア文字の文字列を入力またはペーストしてボタンをクリックすると、各文字に割り当てられた数値を合計し、計算結果を数式で表示します。

AA研ではこれまで、情報資源利用研究センター(IRC)を中心に、アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源のデジタル化やデータベース化を推進し、その利活用のためにオンラインリソースとして公開してきました。オンラインリソースにはアジア・アフリカの言語の辞書・語彙集・音声付きテキストなどの言語資料や、貴重書のデジタル化資料、研究者が収集した写真資料などが含まれます。このようなオンライン研究資源の情報はオンラインリソースポータルに集約されており、アクセスしやすい形に整えられています。

<https://online-resources.aa-ken.jp/>

2022年度 IRC プロジェクト

- ・チベット・ヒマラヤ牧畜農耕資源データベース*
- ・オンライン版ツバル言語文化辞典の構築
- ・Old Tibetan Documents Online
- ・アジア時空間データベースの構築*
- ・バントゥ諸語の声調のマイクロバリエーションに関するデータベース*
- ・少数民族の健康意識調査アンケートのデジタルアーカイブ化 (第2期)
- ・バントゥ諸語の音声データのデジタルアーカイブ化 (第2期)
- ・カイロのイスラーム建築データベースの構築
- ・仮想現実の利用が可能な視覚資料の保存・公開とその利活用のための基礎的研究
- ・日本における国際リスクのGISによる可視化
- ・アラビア文字紀年銘 (クロノグラム) 年代計算プログラム
- ・オスマン演劇ポスター画像公開プロジェクト
- ・オスマン演劇ポスター・音楽データベース
- ・アイヌ語音声資料の文字化テキスト対応づけと公開 (第9期)
- ・マレー語・インドネシア語オンラインコーパス検索システム Malindo Conc の拡充
- ・土田滋博士の台湾原住民語資料データベース構築*
- ・北東ユーラシアの言語文化に関するネットワークの構築*

IRCでは2022年度に17件のオンラインリソースプロジェクトを始めました。そのうち5件は新規のプロジェクトです。
(*は新規プロジェクト)

<https://irc.aa.tufs.ac.jp/>

研究連携ネットワーク

Collaboration Networks

アジア・アフリカの言語学・人類学・歴史学・地域研究分野の研究者・次世代研究者ネットワークの中核として共同研究を展開するほか、より広い視野での分野横断的なネットワーク形成・維持にも積極的に取り組んでいます。

●海外学術調査フォーラム

海外学術調査フォーラムは、海外調査のさらなる展開や分野の垣根を越えた内外の研究者のネットワークを構築する、研究者に開かれた学術交流・情報交換の場として、1975年以来、AA研が企画・運営にあたってきました。第一線で活躍する研究者を招いたワークショップと意見交換のテーマ別分科会、日本学術振興会・科研費担当者を招いた全体会議、ポスター展示の海外学術調査フェスタから構成され、毎年、6月頃に開催されています。

科研費の関係者をはじめとして、海外調査に関わる多様な分野の研究者が集う研究交流の機会として、2004年度までは「研究連絡会」の名称で、2010年度までは「海外学術調査総括班フォーラム」として実施され、2019年度には、テーマ別分科会や若手研究者への支援を拡充し、新たな装いのもとで開催されています。2024年度には、TUFSフィールドサイエンスコモンズ(TUFISCO)やフィールドサイエンスプラットフォームの創設にともない、50年近く続いたフォーラム活動の蓄積を継承しながら、新たな体制のもとで活動を行う予定です。



3つの特徴

■全体会議

全体会議では、日本学術振興会担当者(研究助成課長)による科学研究費執行に関する講演会を開催し、新たな科研費制度の導入や執行方法への対応などについて、海外調査を予定している研究者と学振担当者との、質疑応答や意見交換を行います。

■テーマ別分科会

午前中のワークショップでは、様々な分野の第一線で研究を行う研究者をお招きして、海外調査や共同研究の可能性について議論します。その後、テーマ別分科会では、ワークショップ講師を囲んで議論を深め、さらに、海外調査に関わる様々な課題についても議論します。

■海外学術調査フェスタ

海外学術調査フェスタでは、若手研究者を中心としたポスター・セッションを行い、海外調査で豊かな経験を積んだ研究者と、新たに現地調査に臨もうとする研究者、近い将来フィールド調査研究を計画している研究者などによる情報交換や研究交流の機会を提供します。

<https://gisr-forum.aa-ken.jp/>



フィールドネット Fieldnet

Fieldnetは、フィールドサイエンス研究企画センター(FSC)を拠点に活動を進めているプロジェクトです。日本国内外でフィールド・ワークを行う研究者に、文系理系、専門分野や所属をこえて幅広く参加していただき、フィールド・ワークや研究上の情報を提供しあう場として、また互いの知をむすび、新たな共同研究の輪を構築するネットワークとして機能することを目指しています。2022年度にサイトをリニューアルし、メールマガジン「フィールドネット便り」の配信サービスも始めました。



Fieldnetのサイトでは、フィールド・ワークのための情報を探したり、研究成果を公開し、他の研究者と共有したりすることができます。研究者同士が知的に刺激を与えあい、分野をこえた共同研究を始めたり、科研費などを共同で申請したり、といった可能性にも期待しています。

<https://fieldnet-aa.jp/>

特設ページ「COVID-19とフィールド・ワーカー」では、感染拡大がフィールド・ワークや海外での研究生活にどのように影響したのかについて記録し、共有し、後世に残すことをおまな目的としています。

<https://fieldnet-sp.aa-ken.jp/>

フィールドネット・ラウンジ

フィールドネット・ラウンジと題し、若手研究者による学際的な研究集会の企画を公募し、助成しています。次世代の研究者がシンポジウム等を積極的に企画・実施し、研究者間ネットワークを広げるための一助となることを目的としています。また、ラウンジを通して、分野をこえた研究者間での情報交換やディスカッションの場も提供しています。

<https://fieldnet-aa.jp/lounge/>

イスラーム信頼学

Islamic Trust Studies

X00 総括班
代表 黒木英充 (AA研) 事務局長 太田信宏 (AA研)

A01 イスラーム経済のモビリティと普遍性
長岡慎介 (京都大学)

A02 イスラームの知の変換
野田仁 (AA研)

A03 移民・難民とコミュニティ形成
黒木英充 (AA研)

B01 イスラーム共同体の理念と国家体系
近藤信彰 (AA研)

B02 思想と戦略が織りなす信頼構築
山根聡 (大阪大学)

B03 紛争影響地域における信頼・平和構築
石井正子 (立教大学)

C01 デジタルヒューマニティーズの手法によるコネクティビティ分析
熊倉和歌子 (AA研)

1

ISBN 978-4-80337-313-0

イスラーム信頼学

News Letter No.02
2022

巻頭特集：
2021年度国際会議「国家と市場の相克と調和」

イスラーム信頼学
Islamic Trust Studies

3



1 総括班と7つの計画研究班の研究代表者 **2** 「分断をのりこえてコネクティブできるか？」ベイルート港大爆発（2020年8月）現場を背景としたレバノン移民像（左、メキシコ・レバノン人協会寄贈）と瓦礫でつくられた像「The Gesture」（右、作・Nadim Karam）（2021年9月撮影・黒木英充） **3** ニュースレターを通じた活動報告も行なっています

文部科学省科学研究費・学術変革領域研究(A)

「イスラーム的コネクティビティにみる信頼構築:世界の分断をのりこえる戦略知の創造」

(略称:イスラーム信頼学)
(2020年度-2024年度)

研究代表者: 黒木英充 (AA 研)
事務局長: 太田 信宏 (AA 研)
野田仁, 近藤信彰 (以上 AA 研),
長岡慎介 (京都大学), 山根聡 (大阪大学),
石井正子 (立教大学), 熊倉和歌子 (慶應義塾大学)

<https://connectivity.aa-ken.jp/>

イスラーム暦の始まりが西暦622年で、太陽暦にすると1400年が経過しました。その間に、イスラームは数十人から18億人ともいわれる世界第二の宗教人口に発展し、あと半世紀で世界最大になると推定されています。

アジアとアフリカを中心にグローバルな広がりを見せてきたイスラーム文明は、歴史的に水平方向の人間関係作り長けてきた、ということが出来ます。異なる宗教や文明と交渉を続けてきた、そのコネクティビティの蓄積と信頼構築の諸相を洗い出します。そして、そこから明らかになる暗黙知を、言語化・可視化して戦略知として表現し、現代世界にて深刻化する分断状況を解決するための新たな視座を確立することをめざすプロジェクトです。

イスラーム文明の中にか見出せない特殊な事象のみを扱うのではなく、他の文明との共通性や連関も統合的に解釈して位置付けようとするものです。

イスラーム経済、学知の変換と翻訳、移民・難民、国家体系論、思想と戦略、平和構築といったテーマを扱う研究班に加えて、デジタル・ヒューマニティーズの手法により、これまで見えなかった人々の社会的な関係などを「見える化」する班も大きな役割を果たします。また公募研究を通じて、さらに多様な視点からの研究成果を取り入れることをめざします。

グローバル地中海地域研究 アジア・アフリカ言語文化研究所拠点

Global Mediterranean
at ILCAA

研究代表者：近藤信彰 (AA 研)

拠点構成員：太田信宏, 小倉智史, 後藤絵美,
野田仁, 神田惟 (以上 AA 研), 大塚修 (東京大学),
岡崎弘樹 (亜細亜大学), 坂井弘紀 (和光大学),
中西竜也 (京都大学), 福岡正太 (国立民族学博物館),
山中由里子 (国立民族学博物館)

2022年度より人間文化研究機構の「グローバル地中海地域研究」の一拠点として活動を開始しました。「グローバルな文明圏間の文化の環流」をテーマとしています。

<https://global-mediterranean.aa-ken.jp/>



科学研究費補助金プロジェクト (2023年2月時点。基盤(C), 若手, 特別研究員奨励費等は除く)			
17H06341	新学術領域研究 (研究領域提案型)	床呂郁哉	顔と身体表現の文化フィールドワーク研究
20H05823	学術変革領域研究 (A)	黒木英充	イスラームのコンネクティビティにみる信頼構築：世界の分断をのりこえる戦略知の創造
20H05825	学術変革領域研究 (A)	野田仁	イスラームの知の変換
20H05826	学術変革領域研究 (A)	黒木英充	移民・難民とコミュニティ形成
20H05827	学術変革領域研究 (A)	近藤信彰	イスラーム共同体の理念と国家体系
20H05830	学術変革領域研究 (A)	熊倉和歌子	デジタルヒューマニティーズの手法によるコンネクティビティ分析
21H05374	学術変革領域研究 (A)	太田絵里奈 (塚田絵里奈)	前近代アラビア語史料のデジタル解析による文民エリートの人的ネクスス研究
19H05591	基盤研究 (S)	河合香史	社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓
17H01648	基盤研究 (A)	西井涼子	グローバル化における権力編成の変動と新たなコミュニティ運動—東南アジア大陸部から
19H00554	基盤研究 (A)	外川昌彦	現代南アジアにおけるムスリム社会の多極化の傾向—テロとツーリズム
20H00085	基盤研究 (A)	長澤榮治	イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究
17H02398	基盤研究 (B)	高松洋一	イスラーム圏における簿記史料の通時的・共時的研究
18H03440	基盤研究 (B)	黒木英充	シリア内戦の比較研究—レバノン・旧ユーゴスラビアの内戦と戦後和解
19H01249	基盤研究 (B)	細田和江	脱中心的多言語領域としての「地中海文学」の構築
19H01253	基盤研究 (B)	渡辺己	複統合的言語の語形成と情報構造に関する研究—抱合と語彙的接辞の比較対照を通して
20H01250	基盤研究 (B)	近藤信彰	ペルシア語歴史物語の生成、伝播、受容に関する学際的研究
20H01256	基盤研究 (B)	澤田英夫	ビルマの少数民族言語に関する類型的・系統的俯瞰像の構築
20H01257	基盤研究 (B)	中山俊秀	言語喪失の動態の研究：沖永良部語若年層話者における言語消滅メカニズムの解明
20H01403	基盤研究 (B)	床呂郁哉	もの人類学的研究—技芸複合の視点から
20H04480	基盤研究 (B)	星泉	フィールドデータと文献資料をつなぐ「チベット語民俗語彙=用例データベース」の構築
21H00556	基盤研究 (B)	石川博樹	第2次イタリア・エチオピア戦争をめぐる人種・民族問題の研究
21H00642	基盤研究 (B)	西井涼子	死の人類学再考：アフェクト / 情動論による「現実」への人類学的手法による探究
21H00643	基盤研究 (B)	吉田ゆか子	「コロナ状況」下で育まれる芸能—危機への応答—身体性をめぐる交渉・社会との関係
22H00607	基盤研究 (B)	高尾賢一郎	世俗化と風紀に関する宗教・地域間比較：一神教社会を中心に
22H00656	基盤研究 (B)	山越康裕	「文」の規定にかんする記述的研究
22H00769	基盤研究 (B)	椎野若菜	現代東部アフリカ社会をゆるがすセクシュアリティ・結婚の変容とシングル化
22H03821	基盤研究 (B)	小倉智史	ヒマラヤ西部におけるチベット系ムスリムの総合的研究
18KK0013	国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B))	太田信宏	翻訳から見る近世南アジアの文化多元主義
18KK0024	国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B))	外川昌彦	現代バングラデシュの社会変動とイスラーム—地域研究の統合分析
19KK0011	国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B))	塩原朝子	インドネシア・フィリピンにおける少数言語の記録とコーパス構築に基づく研究
20KK0007	国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B))	中山俊秀	タイ少数民族における持続可能なコミュニティ協働型言語・文化ナレッジベースの構築

中東研究日本センター (略称 JaCMES)

JaCMESは、2005年にレバノン政府の閣議決定による認可を得て2006年にベイルート市中央区に設置された、AA研の海外研究拠点です。周囲には、レバノン議会議事堂、国の式典などが挙行される殉教者広場、レバノンで最大のムハンマド・アルアミン・モスク、マロン派教会、ギリシア正教会、首相官邸、在レバノン日本大使館などがあります。

JaCMESでは常駐の特任研究員(現員:篠田知暁)が現地研究に専念するとともに、AA研の共同利用・共同研究課題(現プロジェクト「接続する海としての地中海」研究代表者:篠田知暁)が実施されています。

さらに、「ベイルート若手研究者報告会」を2006年以来ほぼ毎年開催し、大学院博士後期課程以上の若手研究者を対象に公募・選考して派遣し、レバノンや中東・ヨーロッパ諸国からコメンテータの研究者を招聘して、研究発表と討議の場を提供しています。若手研究者にとっては、自らの研究を海外の専門研究者の前で発表し、質疑を通して評価を得る貴重な機会になっています。このほか、ベイルート・アメリカン大学をはじめとする諸大学やベイルート・オリент研究所(ドイツ)などの研究機関との共催による公開講演会や現地研修セミナーを開催するほか、映画会議も開催し、日本から関係研究者を招聘するなど、歴史・経済・文学・芸術・社会・環境問題など多岐にわたる学術交流を推進してきました。

https://meis2.aa-ken.jp/base_beirut.html



コタキナバル・リエゾンオフィス (略称 KKLO)

海外研究拠点KKLOは、2008年3月1日にマレーシア国サバ州コタキナバル市に開設されました。同オフィスは、東京外国語大学が2005年度から5年計画で実施している中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として設置されたもので、ベイルートに既に設置されていた中東研究日本センターに続く同プロジェクトによる2番目の海外研究拠点です。

KKLOは、東南アジアにおける政治・社会・文化に関する総合的学術研究拠点として、サバ州政府により設立されたサバ開発研究所(Institute for Development Studies [略称:IDS])の全面的な協力により、同研究所内に設置されました。設置以来、KKLOでは、日本人研究者によるコタキナバルでの現地講演会や、東南アジアの研究者との合同による国際ワークショップやシンポジウム等を定期的に開催しています。

なおKKLOの位置するサバ州は、ブルネイ、インドネシア、フィリピン等の東ASEAN成長地域、南シナ海及びインド洋の交差点にあたり、多様な文化の交流地域を形成しています。AA研は、アジア海域世界のダイナミズムの解明にとって最適なこの地を研究拠点とし、マレーシア、日本及び関連諸国の研究者と関係者に利する多様な国際共同研究プログラムを今後とも推進していきます。

https://meis2.aa-ken.jp/base_kotakinabalu.html

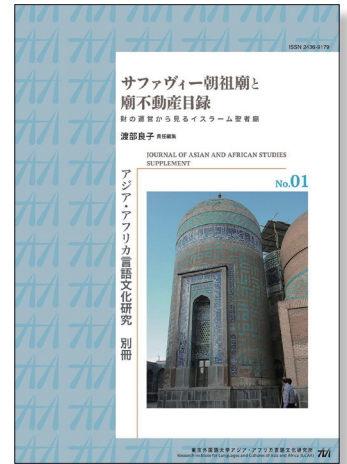


●定期刊行物

『アジア・アフリカ言語文化研究』

(年2回発行)

国際学術雑誌『アジア・アフリカ言語文化研究』(*Journal of Asian and African Studies*, 略称 JAAS, 1968年創刊)は, 所外の研究者をふくむ編集専門委員会, および所員からなる編集部によって運営され, 毎号, 査読を経た高水準の言語学・文化人類学・歴史学/地域研究に関する論文, 資料が掲載されています。海外からの投稿も多く, 国内外から高い評価を得ています。2021年3月刊行の101号よりオンライン誌となりました。さらに2021年度末からは共同研究プロジェクトの成果をまとめた別冊も刊行しています。このほか定期刊行物として『アジア・アフリカの言語と言語学』, *NUSA: Linguistic Studies of Languages in and around Indonesia* を刊行しています。



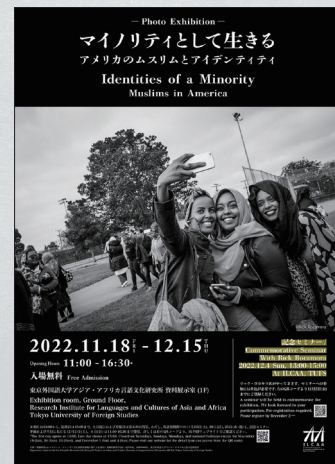
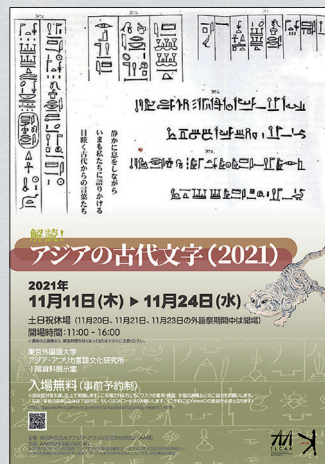
<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/jaas>

展示企画

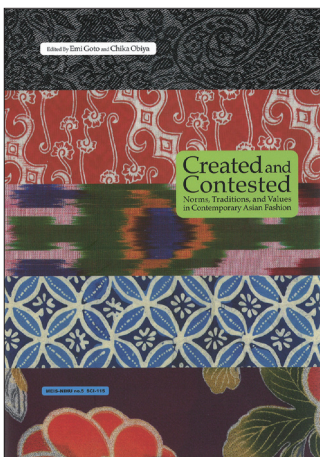
AA研スタッフが収集したアジア・アフリカの言語・文化に関する貴重な資料や, さまざまな共同研究プロジェクトの成果を広く一般に公開するための企画展を毎年開催しています。

過去の展示企画についてはこちらをご覧ください。

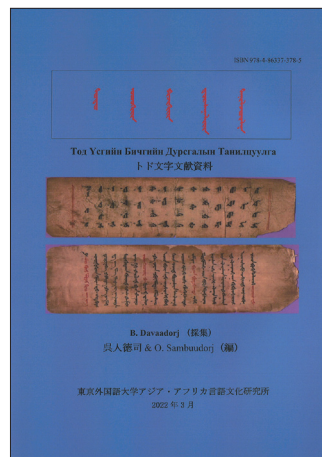
<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/event/exhibitions>



●書籍



『Created and Contested』



『トド文字文献資料』



『内国史院檔 順治元年 I』

このほか, 共同研究を中心とした研究成果を数多く刊行しています。詳細は <https://biblio.aa-ken.jp/> をご覧ください。



荒川 慎太郎 教授
西夏語学, 西夏語文献学



床呂 郁哉 教授
東南アジア島嶼部の人類学



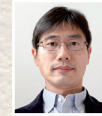
品川 大輔 准教授
バントゥ諸語, 記述言語学



飯塚 正人 教授
イスラーム学・中東地域研究



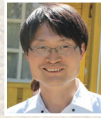
中山 俊秀 教授
ワカシュ諸言語 (北米北西海岸),
言語類型論, 言語人類学



野田 仁 准教授
中央アジア史, 露清関係史



太田 信宏 教授
インドの歴史



長縄 宣博 教授
中央ユーラシア近現代史,
ロシア・中東関係史



山越 康裕 准教授
モンゴル諸語



河合 香吏 教授
人類学, 東アフリカ牧畜民研究



西井 涼子 教授
東南アジア大陸部の人類学



吉田 ゆか子 准教授
文化人類学, インドネシアの芸能・
宗教・仮面文化の研究



呉人 徳司 教授
言語学, チュクチ語



星 泉 教授
チベット文化圏の言語学



安達 真弓 助教
ベトナム語, 語用論, 社会言語学



黒木 英充 教授
中東地域研究・東アラブ近代史



渡辺 己 教授
セイリッシュ語



河合 文 助教
人類学, 東南アジア, オラン・アスリ



近藤 信彰 教授
イラン近代史



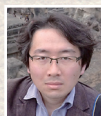
石川 博樹 准教授
アフリカの歴史



黒沼 太一 助教
中東・考古学



澤田 英夫 教授
ビルマ系少数民族言語の記述, 東南ア
ジア大陸部インド系文字の体系



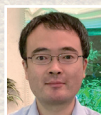
小倉 智史 准教授
南アジア地域研究・歴史学



後藤 絵美 助教
現代イスラーム研究, ジェンダー



塩原 朝子 教授
言語学, インドネシア諸言語の記
述研究



倉部 慶太 准教授
ジンポー語, チベット・ビルマ諸語,
ミャンマーの言語



村津 蘭 助教
西アフリカ・宗教人類学



高松 洋一 教授
オスマン朝史, 古文書学,
アーカイブズ学



児倉 徳和 准教授
記述言語学, シベ語 (満洲語口語)

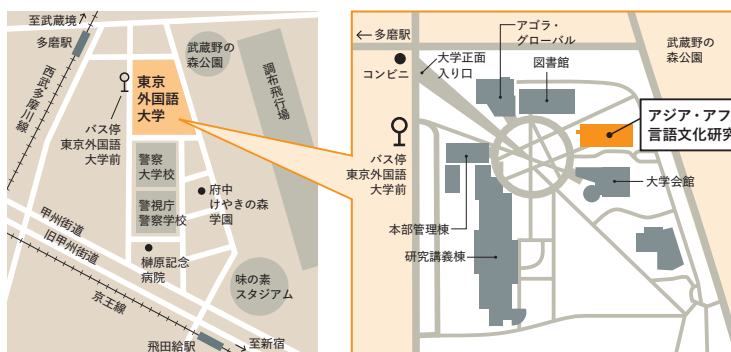


外川 昌彦 教授
南アジアの人類学,
インド・バングラデシュ研究



椎野 若菜 准教授
社会人類学, 東アフリカ民族誌

交通案内



- JR中央線「武蔵境」駅のりかえ
西武多摩川線「多磨」駅下車徒歩5分(JR新宿駅から約40分)
- 京王線「飛田給」駅北口から京王バス「多磨駅行き」に乗り
「東京外国語大学前」下車(約10分)

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所

〒183-8534
東京都府中市朝日町3-11-1
TEL: 042-330-5600
FAX: 042-330-5610
HP: <http://www.aa.tufs.ac.jp/>



詳しいアクセス方法は
QRコードから
ご確認ください。